
俺の夏休みがこんなにゲーム戦争なわけがない ~ 短編 ~

gurom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の夏休みがこんなにゲーム戦争なわけがない　　〈短編〉

【Nコード】

N1555U

【作者名】

guroum

【あらすじ】

俺の名前は高坂京介。

ごくごく平凡な高校生である。

と言えなくなっているのが現状だ。

妹の秘密を知ってしまったが為に、
徐々にオタクになりつつあるわけで……

そんな妹のわがままに付き合っ
て秋葉原にきたのだが……

俺の妹がこんなに可愛いわけがないと僕と彼女のゲーム戦争のクロ
スオーバーです。

6 / 2 2 加筆・修正いたしました

俺の名前は高坂京介。実に平凡な高校生である。いや、だったと言っべきか。

ことは1年ほど前に遡る。

ひょんなことから俺は妹の世間には公表できないような裏の顔を知ってしまった。

ティーン誌のモデルだったり、陸上で優秀な成績を残したり、学力テスト県内5位だったりする俺とは全くもって正反対の妹の裏の顔をだ。

なんと、この優秀な妹様は実はアニメやゲームの好きなオタクだったんだ。

そんなことをカミングアウトされて、その拳句人生相談という名目でいろいろなことをさせられた。

話すと長くなるので割愛させてもらうが興味のある方は是非ともいつか聞いてもらいたいな。

夏休みだというのに、俺は妹とその友人2名と共に秋葉原に来ていた。

何が楽しくて妹と秋葉原に来にやなんのだ……と、1年前の俺は思っていただろう。

つまりだ、今はそうでもない、ということになる。

夏コミやらなんやらを経験してしまった俺は、完璧にオタクに一步踏み込みしまったらしい。

もう、エロゲやっても何も感じなくなっただしな。

さて、なぜ俺がここにいるかと言うとだな……

「ねえあんた、秋葉原行って来てよ」

妹にそう言われたのはつい3日前だ。

「いきなり兄になんてこと言いやがる」

突然秋葉原に行つて来いなんて、お前頭湧いてんじゃねえの？

まあ、こんなこと口にはできんが。

もし口にしようものなら明日、いやその瞬間から家には二度と入れないかもしれないからな。

それに、話も聞かずに拒否するのもアレだろう。とりあえず話だけは聞いてやることにした。

「まあ良い。話ぐらいなら聞いてやる。今度は何だ？」

結局聞いてやってるじゃないかって？ ふん！？ どうせ俺はシスコン野郎だよ！！

「えつとね……あんたに頼みたいことがあるの」

頼みたいことがあるの……ねえ。最後の人生相談と以前言っていたので、人生相談ではないのだが、結局は同じようなことである。

正直こいつの頼みたいことはろくなもんじゃ無いだろうな。今までの経験からそう言い切れるね。

「何だ、言ってみる」

親父と対決したり、妹の友人に誤解されたりするより楽なミッシェンを頼むぜ……

「サインを貰つて来て欲しいの」

へ……へえ。サインね。

こいつが欲しがるサインって何だ？

「あんた星野くららつて人知ってるよね？ まあ、知らないなんて言ったらブツ飛ばすけど」

とんだ恐怖政治だな。俺みたいな平民に拒否権は与えられてないってか。それに臆して従うしか無い俺も俺だが。

「ああ知ってるぜ、星くずういつちメルルのあの人だろ？」

どうよ？ これぐらいのことならちゃんと把握してんだよ！！

外からお前も立派なオタクだな、という声が聞こえた気がするが気にしない。

「自分で行きやいいじゃねえか」

とりあえず反抗してみた。俺の予想通りならここで強烈な罵声を浴びせられるだろう。それを覚悟しての反抗だ。

さすがにサイン会に行けつてのはちよつとねえ……

「だつ……だつて……」

まさかの俺の予想大ハズレ。想定外の返事に俺の頭は一瞬パニックになる。

「だつて？」

「ひ……１人で行つて誰かに見られたらヤダし」

つまり、自分が１人で行くのは嫌だけど、俺なら１人で行つても大丈夫だろ。つてことだな。

ざっけんなああ……！！！！

俺にも世間体つてのがあるんですよね。クラスの女子に見られでもしたら、夏休み明けに晒し者にされて公開処刑だろう。

ん、秋葉原に来てる時点でそいつも十分オタクなのか？

「俺にもお前と同じで世間体つてのがあるんだよ。残念だったな」

「チツ……」

相変わらずの舌打ちである。これが俺の妹クオリティだ。褒められたもんじゃ無いけどな。

「じゃあ、一緒に来てよ……」

こいつ最初からそのつもりだったろ？ 桐乃はそういう奴だ。自分の感情を素直に出せつてんだ。

「黒猫や沙織はどうするんだ？ 何なら一緒に行くか？」

これは所謂保険というものだ。実妹とデートしてるなんて思われたら嫌だしな。

周りにいる奴らが妹と認識することは無いと思うが。

「あんたがそうしたいって言うなら……」

かくして俺は秋葉原にいるのである。

そしてここは、秋葉原UDX内の東京アニメセンターだ。

この中で星野くららって声優のサイン会があるんだとよ。ちなみにこの星野くららって人は星くずういちメルル関係のイベントで何度か目にしたことがある。ついでに言っておくと、この人に似たメイドさんも見たことがある。

え？ ずいぶんとオタクしてるじゃないかって？ ほつとけや。それにしてもすごい行列だな。200mぐらいはあるんじゃないのか？

さすがは聖地『秋葉原』だな。

「ああ、もうっ！！ いつまであたしを待たせんのよー！！」

桐乃さん、ご乱心である。こいつは行列に並ぶのがとにかく苦手な性質らしいな。1年前の夏コミの時も似たような感じだったことを思い出す。

そして、またも夏コミの時同様、PSPを取り出しゲームを始めやがった。

何やってるのかと覗き込んでみると、BLAZEBLUEとかいうタイトルの格ゲーやってたよ。

なんだか、桐乃の好きそうな魔法少女っぽいキャラクター『プラチナ・ザ・トリニティ』とかって名前のキャラを使ってたぞ。

といつても、俺に分かるのは名前ぐらいだな。何がなんだかさっぱり分からん。

桐乃いわく、「あんたに似てるキャラがいるのよ。ハザマ テルミって名前のキャラんだけどさー」だそうだ。さっきも言ったけど、ほんとに何がなんだか……

それから25分ほどの後、ようやく俺たちの番が回ってきた。

サインをもらったときの桐乃の顔はとても嬉しそうだった。

夏コミでセルを見つけたときの俺も同じような顔をしてたんだろうな。

それほど、自分の好きな人とかに直で会うのは感動的なものってことだな。

そして、今はそのイベントの帰りだ。帰りといってもまだ家に帰るわけじゃ無いけどな。

このあとアニメイトやらラジオ会館やらとらのあなやらに行った
りするんでね。

「やや、京介氏。今日は誘っていただき感謝感謝でござるぞ」

このオタクファッションの長身でよく分からん言動の女は桐乃の友人兼俺の友人だ。

名前は沙織・バジーナ。もちろん本名じゃないぜ。ネットでの名前、ハンドルネームってやつだ。

この名前でSNSの管理人なんかもしてらっしゃる。

みてくれからは想像もつかないが実はお金持ちのお嬢様なのだ。

「そつえば今日はラジオ会館でJBCGが開かれるのでしたな。

黒猫氏はそれに出る為に一緒にさつたのでしたか」

JBCG？ おつと……聞き慣れない単語だな。

訝しげな顔をしていると、ゴスロリファッションの女、黒猫が口を開く。

こいつも沙織同様、俺と桐乃の共通の友人だ。学校・部活の後輩でもある。

黒猫という名前も前述の通りハンドルネームだ。

訝しげな顔をしていた俺の心を汲んで説明してくれるのかと思いきや、

「あら、あなたそんなことも知らずに今まで生きていたのかしら？
さすがは何の力も持たない平民ね。いえ、平民以下の屑かしら？」

とんだハートブレイカーだった。午前中桐乃の相手をして崩壊寸前の俺の心は音も無く、ベルリンの壁の如く崩壊する。

黒猫の奴隷しんでやるな……

「あ……えつと、黒猫、さん？ そのJBCGってのは一体なんなんですかね？」

僅かに残った心を振り絞って黒猫に質問をする。

崩壊した俺の心はもうどんな口撃も受け付けられないぜ……！

「ゲームの大会、ジャパン・ゲーム・バトル・チャンピオンシップの略よ。毎週どこかで開かれていて、上位入賞で得られるポイントを集めると決勝大会に出場できるのよ」

黒猫は淡々と説明してくれた。

なるほど。つまり予選大会で良い成績を残せば決勝大会に行けるってわけね。

「それに、決勝大会に優勝するとワールド・ゲーム・バトル・チャンピオンシップ通称W G B Cに出場できるの」

すげえ大層な大会だな。今やゲームは単なる娯楽じゃないってよくわかったよ。

で、黒猫は出場する以上そのW B G Cまで行くつもりなんだろうな。

「ところで、何のゲームでその勝敗を決めるんだ？」

シスカリ……はさすがに無いよな？ いや、あつたらマジでビツクリしますけど……

「大会にもよるけど、今回はD I S S I D I A 0 1 2 F I N A L F A N T A S Yだそうよ。今回は公開されてるけど公開されない場合もあるわ」

そのなんとかデュオデシムってのはアクションか格ゲーなのかね？もしそうなら黒猫には物足りないんじゃないかねえのか？

「ちなみに私は皇帝を使うつもりよ」

皇帝ね……いかにもってな感じだな。

「おお、黒猫氏は皇帝使いでしたか！！拙者はギルガメッシュをメインに使っておりますぞ」

うむ、わかる人にしかわからない会話ってのはこういうのを言うんだな。

桐乃のも横で（。0。）な顔してサイン眺めてるし。

「星野くらさんの直筆サイン……おお！！」

ああ、なんだ。話がわからないんじゃないじゃ無くて、元から聞いてないのな。

（。0。）こんな顔してたのはサインに見入ってたからなのか。
とんだ勘違いだったな。

雑談しながらようやく俺達はラジオ会館に辿り着いた。
中に入ろうとしたら、入り口付近になにやら一団がいるではない
か。

制服を着た高校生らしき男女と、白衣の男がいる。

この人達もJ B G Cに参加するのかな？

盗み聞きをするつもりじゃないが、ちょっと聞き耳を立ててみる
と、話が聞こえてくる。

「君、今日こそは優勝するぞ！ 前もって練習したんだ、必ず勝て
るさ！」

今のは女の方の言葉ね。

「でも天道さん、僕まだカインしか使う練習できてませんよ」
で、こつちが男の子言葉だ。

女の方は天道という名前らしいな。

大丈夫だ岸嶺君！ 君にはゲームの才能がある。回数を重ねてい
けば絶対に勝てる！」

「白衣の男が、高校生らしき男にそう言っているのが聞こえた。

高校生らしき男の名前は岸嶺みたいだな。

「瀬名先生も参加するんですね？ どのキャラを使うんですか？」
岸嶺と呼ばれた男が白衣の男にそう質問している。

白衣の、瀬名先生と呼ばれた男が返答する。

「それは本番までのお楽しみだ！ さあさあ、後ろが詰まっている、
早く中に入ろうじゃないか」

「ちよつと、アンタ！！！！」

突然聞こえてきた桐乃の叫び声で意識が戻る。

ハッ……俺は今まで人の話を盗み聞きしていたのか。とんだ悪趣味だ、我ながら万死に値する行為だな。

「むむ、もしや京介氏はあの女の子に見惚れていたのではござらんか？」

いきなり何言いやがる！！　まるで俺が変態みたいじゃねえか！！

「どうなんです、京介氏？」

だんまりを決め込んでいた俺に沙織が追撃を仕掛けてくる。

どんなこと言っても逆効果なんだろうな……

そんなことを考えていると桐乃が何やら一言。

「否定しないんだ。へえー兄貴はあの女の子に見惚れてあतんだ」

おお、桐乃さんマジ怖いっす。

『とんだ変態ね、いつそ死んでくれればいいのに』

桐乃と黒猫が声を揃えてそう言った、

お前ら俺を貶すときに限ってよく息が合うよな……

「おいおい、誤解だつて……お、俺にはお前たちしか見えてないぜ」

何言つてんだろうな、俺。自分でも訳わかんねえよ。

「キモッ！！　あんたただシスコンなの？　それともロリコン

？　ネココン？　なんでもいいけどホントに死んでつてば」

そればかりは桐乃の言う通りだ。そう思われてもおかしく無い言動をしたんだからな。

ところで、ネココンってなんだよ？

「あなたとんでもない性癖の持ち主ね。シスコンでロリコンでネ……

……ネココンで、メガネフェチだなんて。おぞましいわ、消えて頂戴」

黒猫さんがさらに俺のハートをブレイクしてきた。もうやめて！

！　俺のライフはもう0よ！！

そろそろキレてもいいですかね？　いくら俺でももう耐えられねえわ。

「ささ、そろそろ中に入ろうではないですか」

そんなとき、沙織が気を利かせて話題を変えてくれた。元はといえばお前の発言が原因だしな。

言っておくが、俺はシスコンでもロリコンでもネココンでもメガネフェチでもないぜ。それだけはご理解願いたいね。

そこからは終始無言でラジオ会館の中の会場まで進んでいった。

俺のせいなのか？ 俺のせいなのか？

「お……おお、す……すごい人の数だな……」

沙織以外の女子の目を気にしながらとりあえず発言してみた。命が惜しいから発言には十二分に気をつけないとな。

「は？ そんなの見ればわかるじゃん。あんた、そんなことしか言えないの？」

おっと、鋭いツツコミだな。今のこいつに何を言っても、同じような答えしか返ってこないってか？

一方黒猫はというとだな。

マスケラゲーム化のポスター見てΣ（・□・；）な感じた。

マスケラゲーム化するのか。俺も買ってみるかな。

「良かったな黒猫。マスケラゲーム化じゃねえか」

「ゲ……ゲーム化ですって？ わ……笑わせてくれるじゃない。どうせバンムお得意の原作レイプのクソゲーに決まってるわ」

そんなこと言ってるけど、お前の目輝いてるぜ？

ってかさりげなくゲーム会社貶してるんじゃないよ。

黒猫も桐乃と同じで素直じゃないからな。これはきっと内心

キタ——（。。）——！！

な感じなんだと俺は推測するね。

『第98回J B G C秋葉原大会！ これより開催いたします！』

司会なのかな？ 女の人の声が開催を宣言した。

「おお、皆様方そろそろ始まりますぞ」

沙織が俺たちに向き直ってそう言う。やっと始まるのか。

ところで、誰が出場するんだ？

黒猫と沙織は確定だよな……

「何を莫迦みたいな顔で突っ立っているのかしら？ さっさと準備しなさいな」

これは俺に対してか？ 桐乃に対してか？

「ん？ お2人も出場するって黒猫氏から聞いておりましたか？」

沙織さん今何と？ 俺達も出場するだって？ そんな話聞いてねーよ！！

もしかして……黒猫のやつ勝手に俺達も頭数に入れてたんだな。

「チーム戦なら4人は必要ですからな。ささ、お2人も準備ですぞ」
半ば強引に俺達も出場させられちゃったよ。桐乃のやつポカーン
てしてるぜ。

無理もないな。いきなりそんなことわれちゃ困惑するのも理解
できなくは無い。現に俺が今まさにその状況だからな。

「ちよつとあんた、何勝手に話進めてんのよ！！ いつあたしが出る
って言ったのよ！！」

桐乃がすごい剣幕で黒猫をまくし立てる。おお怖ええ……

「あら、私はただ親切で参加させてあげてるのよ。あなたが夏休み
を1人虚しくキモオタ趣味で過ごすのが可哀相だから。むしろ感謝
して欲しいのだけど」

おいおい……それ以上桐乃を刺激しないでくれよ。誰が被害を被
ると思ってるんだ？ 俺だよ。

イッテエー！！！！！！！！！！

思いつきり足を踏みつけられた。それもハイヒールで。

桐乃さんよお……それだけはやつちゃダメだろ……

「おいテメエ！！ いきなり何しやがる！！」

ついに噴火しちまったわ。周りにいる人の目がすげえ怖いの。

みんなしてこっち睨んでくるなよ。俺は希少生物か？ それとも

可哀相な人なのか？

「まあまあ京介氏、ここは抑えて……拙者を助けると思って参加してはくれないでしょうか」

くそっ……こいつには世話になってるからな……邪険にあしらうことはできないな。

「仕方ねえな、参加してやるよ。おい桐乃、お前もだからな」

「ちょ……何勝手に決めちゃってんのよ！！ バカ！！ ヘンタイ！！ 死ねっ！！」

バカとヘンタイと死ねを同類に並べるなよ。

そんなことを考えていると本日2度目のハイヒールアタックが俺の足に炸裂した。

ああ、走馬灯が見えるぜ……短い人生だったな……

ハッ……一瞬三途の川が見えた気がする。

こいつには呆れたね。まさか2度も足踏まれるなんざ思わねえよ普通。まあもう反論する気も起きないけどな。

さて、それから15分程経った頃ようやくそのJBGCとやらが始まった。

ぶっちゃけ、シスカリくらいしかマトモに格ゲーしたことないぜ？ シスカリを格ゲーとすらするならだが。

しかもこのDISSIDIA 012 FINAL FANTASYはシスカリと違って奥行きもあるなんとも立体的なゲームときたハハハ……2D格闘ゲームじゃなかったのな。俺無理だわこれ。桐乃がさっきやってたBLAZEBLUEならまだできたかもしれない……

そんな不甲斐ない俺を見て沙織が俺達の番がくるまでの間レクチャーしてくれた。

このDISSIDIA 012 FINAL FANTASYはファイナルファンタジーのキャラクター達を操るゲームだそうだ。ジャンル的にはアクションRPGだとか。

RPGというくらいだから育成要素でもあるのだろう。でもな、RPGってのはロールプレイングゲームの略だよな？ どう考えてもロールプレイングでできそうにないよな？

で、肝心のゲームの進め方かというと、ブレイブ攻撃でブレイブっていう数字を奪い合ってHP攻撃でそのブレイブの数値分のダメージを相手に与えるのだとか。

他にも召喚獣やらEXモード、アシスト攻撃なんていうのもあるらしい。究めようとするのとどれだけ時間がかるんだろうな？

アクションが苦手なら、コマンドを選ぶだけのお手軽RPGスタイルってのもあるらしい。俺にとっては朗報だな。

「参加チームナンバー15番の皆様いませんか！？ こちらの第5ブロックに集合してください！」

ここで、俺達の順番が回ってきやがった。

先鋒 俺、次鋒 桐乃、副将 沙織、大将 黒猫。この順番でバトルするらしい。戦闘形式は勝ち抜きだとか。つまり俺が頑張れば1人で全員倒せるってわけだ。どう考えても無理だが。

まずは、俺からだな。見てろよ桐乃。俺のプレイを見て恐れ戦くがいい！！

試合で使うPSPが設置してある台まで歩み寄る。うん、なんだか緊張するな。

最初はキャラクターの選択からか。うーん、どのキャラを使うか悩むな……

オニオンナイト……タマネギ剣士ってなんだよ。スコールか、ガブラスが良いかな？ この2人からなら……ガブラスだな。カッコいいしさぞかし強いんだろうな。

俺のこの選択は大きな間違いだった。何故かって？ だってこいつHP攻撃できないもん。□推してもEXチャージだけしか使えないんだぜ？

案の定、負けた俺は桐乃にバトンタッチする。

あーあ、大口叩いたのにこの様かよ。確実に桐乃にバカにされるよな。

「あたしの戦いをちゃんと見ときなさいよ、負け犬」

ほ……ほら見る！！ 予想通り負け犬とバカにしてきやがった！！
ほ、ほう……大した物言いじゃねえか。そこまでいうなら絶対に勝てるんだよな？

桐乃は俺がタマネギ剣士とバカにしたオニオンナイトを選んでいった。

なんとか1勝はできたみたいだが、2人目に負けて帰ってきやがった。まあ、でも1人倒しただけで十分俺よりも強いよな。

残りの敵は沙織の操るギルガメッシュが成敗した。刀持ってるし成敗でいいよな。

最後の相手に至っては、相手の体力を僅かに残して自分のEXゲージが溜まるまでブレイブ攻撃のみという屈辱的行為を受けていた。わざわざ、EXモードになって倒す必要があるのかよ、と沙織に尋ねたところこの様な返答があった。

「いや、深い意味はございませんぞ？ ただ、ムービーを楽しもうと思った次第で」

さらっとヒデエこと言うなよ。対戦相手のことを思うと目から汗

が出てきたぜ。しかも居合斬り発動とかで一瞬で相手のブレイブ消滅してたしな。

俺がこんなことされたらショックでゲームを見ることもできなくなるかもしれないぞ。

とりあえずそのなんだ、ご愁傷様だ。

その後も沙織の活躍で俺達は決勝戦までコマを進めた。ほとんどというか全部沙織のお蔭だ。俺達は何もしちゃいない。

黒猫に至っては、沙織が無双をするあまりまだ一度も戦っていないしな。

ついに決勝戦だ。相手は……ラジオ会館の入り口にいた奴らじゃねえか。チーム戦には4人以上じゃないと出られないんだよね？
どっかから連れてきたのかね？

「おお、高坂じゃないか！！ お前もJ B G Cに出場してたのか！！」

何だか聞き覚えのある声だな。この声は確か……

「五更も一緒にいるってことは……さてはデートも兼ねての出場か！！ やっぱりお前ら付き合ってたんだな！！」

なんだ。ただのゲー研の部長か。

ってオイ！！ 何で部長がこんな所にいるんだよ！！

エロゲばかりやってるんじゃないやなかったのか。

この方は俺と黒猫が所属してるゲーム研究会の部長だ。ん？ 研究会なんだから会長じゃないのかって？ こまけえこたぁいいんだよ。とにかく部長だ。それ以上でもそれ以下でも無いぞ。

三浦絃之介って名前だが、この人と俺の初対面はマジで衝撃的なモノだった。思い出すだけでも泣けてくるぜ。で、そのあとに桐乃が……

「な、なんで部長がこんな所に？」

とりあえずは疑問を解決するために真相を追及しないとな。

「今日は部活もないし、久しぶりに秋葉原に来ていたんだがな、ラジオ会館の前であの人達と遭遇したのさ。で、その人達にJ B G Cに参加して欲しいって頼まれたってわけだ」

そりゃ災難だったな。なんでこんな人選んじまったかね？

「え……と、その人達ってのは？」

「聞いて驚くな！！ あの伊豆野宮学園の現代遊戯部の部員達なのだ！！」

いや、その伊豆野宮学園ってのがよくわからんから驚くに驚けないのだが……

それになんだ？ 現代遊戯部って珍妙な部活は？

「どうした高坂？ まさか伊豆野宮学園を知らないってわけじゃないかろうな？」

うつ……痛い所突いてくるな。

「えっとですね……そのまさかなんですけど……」

「そうか……お前は知らなかったのか……」

な……何だよ？ 俺なんか悪いことしたかな？

「ならば教えてやろう！！ 伊豆野宮学園というのはかの有名なお嬢様学校なのだよ！！ 今は少数ながら男子を受け入れているようだがな」

お嬢様学校ねえ………そういうやここにいる沙織もそんな感じだったか？ 今から予言しとくが絶対祿なやついないだろうな。

「そして、現代遊戯部というのは平たく言えばゲーム部といった感じだ。で、そこにいる彼女……天道しのぶは生徒会長兼部長を務めているのだ！！」

生徒会長がゲーム部の部長ね………やっぱり祿なやつじゃなかったな。お嬢様学校の生徒会長がゲーム部の部長だと？ 笑わせてくれるじゃねえか！！

「そして、こっちの男子が伊豆野宮の貴重な男子生徒で現代遊戯部

員の岸嶺。白衣の人が顧問の瀬名先生だ」

字は違ふんだろうが、なんだか赤城の妹みたいな名前だな。

「で、俺がラジ館の入り口にいる時にその瀬名先生から声優と結婚したくないかと聞かれてな。成り行きで助っ人として参加することになったのだ」

声優と結婚したくないかだと？ さっきまで声優のサイン会にいた俺になんてこと言いやがる。一瞬あのメイドさん似の声優の顔を思い出しちゃったじゃねえか。

「というわけだ。俺は現代遊戯部の助っ人で参加だから、決勝戦では敵同士だな」

「ま、まあ頑張りますよ」

まったく……また変な人達と関わっちまったな……

一回戦は例の如く、俺の出番だ。あれ以来もうガブラスは使ってねえ。まさかあんなキャラだとは夢にも思わなかったよ。それからウォーリア・オブ・ライトってキャラを使ってるがこっちは実に使いやすいな！！

俺の相手は、現代遊戯部の岸嶺という名の男子生徒。カインとこういうキャラを使うみたいだな。

まず、俺は敵に接近しブレイブ攻撃を仕掛ける。先手必勝だ。ウォーリア・オブ・ライトは敵の操るカインに向かい剣を横に薙ぎ払う。直撃するかと思っただが、すんでの所で後方へと避けられてしまった。

こちらの攻撃が終わる瞬間を狙い、即座に間合いを詰めたカインは槍の連撃をお見舞いしてくれた。

敵のコンボが決まり、ウォーリア・オブ・ライトは壁に激突する形で吹き飛ばされた。

壁に激突したウォーリア・オブ・ライトに更に追い討ちをかけるように風の弾丸が迫り来る。後ろが壁のために避けることもままならない。

その後も一方的な攻撃を決められ、たまにしか攻撃することができなかった。

そして、戦闘開始から約3分後に勝敗が確定した。

もちろん俺の敗北だ。ダメだ、俺じゃ相手にならない。

それになんだ？ あの動きは。まるで……プレイヤーがカインとシンクロしているようだった。

岸嶺はその腕前で桐乃、沙織と次々に撃破していった。一体何者なんだ、こいつは？ あの沙織をいとも簡単に倒しちまうなんて……

相手はまだ先鋒だというのにこっちは大将まで追い詰められている。

「まさか、あの人……」

黒猫がそんなことを呟いた。つまり、どういうことだ？ わけわかんねえな。

「そう……そういうこと……面白いじゃない」

1人で合点されてもこっちは何もわかってないんだが。

「そうでござるか。黒猫氏もあの人の特徴に気づいたのでござるな」
え？ もしかしてわかってないのって俺だけだったりするのか？
そう思って桐乃を見やる。

「ねえ、どうということなのよ？」

どうやら桐乃もわかっていなかったらしく、沙織に問うていた。
「うむ、簡単に言うんですけど……ズバリあの方はキャラクターそのものになりきっているのだからよ。それ故にあのような反応速度を誇っていたのですよ」

そうか、だからシンクロしているように感じたんだな。とんでもないスキルの持ち主だなったく……

「ねえ、あいつにエロゲやらせたら面白そうじゃない？」

さりげなくとんでもないこと言うなよ桐乃。いや、俺も一瞬考えただけどそれはダメだろ。

カイン（僕）は槍を携えて皇帝（黒猫）と相対していた。

ついに皇帝との決戦だ。自然と槍を握る力が強まるのが感じ取れた。それほど緊張しているのだろつ。

「人間風情が……ここで滅びるといい」

黒猫の言葉が皇帝の姿にいやにマッチしている。

「何を言う。滅びるのは貴様だ」

僕も負けじと言い返す。

戦闘開始の合図とともに、僕は後退し間合いを取る。

皇帝の戦闘スタイルからして近寄るのは危険だ。いつ機雷なんかを設置されるか……

十分な間合いをとったのを確認すると、ぼくはサイクロンを放った。

だが、皇帝は即座に地雷を設置しそれを盾とした。地雷による盾に衝突したサイクロンは地雷もろとも消え去ってしまった。

皇帝はそのまま続けて機雷を設置していた。僕を近づけさせないつもりだろつ。

だが、それは予想の範囲内だった。機雷に当たらないように攻撃すれば問題はない。ならば、僕にはジャンプという優れたモノがあるじゃないか。

タイミングを見計らい、タメずに空へと舞い上がる。落下目標は皇帝だ。しかし、皇帝の近くには機雷が浮遊している。

最高地点まで到達すると、身体は地上に向かい重力に引き寄せられる。僅かに重心を移動させて軌道を修正する。

これで当たる！！ そう思ったが、とんだ思い違いだった。皇帝はこうなることを既に予測していた。だから、その場から一步も動かなかったのだ。

皇帝にジャンプを直撃させることができた。そう確信したが、実はその時には既に皇帝の罠の中にいた。皇帝にダメージを与えた僕のブレイブは0を示している。

落下直後の僕に皇帝は杖を接触させてきた。

ボムアタックだ。

しまった！！ 最初からこの時を狙っていたのか！！

ブレイブが0の僕にブレイブ攻撃を仕掛ける。それは、マップブレイブを手に入れることに等しい。

そうしてマップブレイブを手に入れた皇帝は次なる策を披露する。

皇帝は召喚石を掲げたのだ。そこから現れたのはイフリート。使用した者のブレイブを1.5倍にする効果を持つ召喚石だ。

しかも、これはオートで発動するものだった。

つまり、ダメージを受けてからマップブレイブ取得、イフリート召還の流れはは皇帝によって仕組まれた罠だったのだ。

ボムアタックにより後方に飛ばされた僕は足元の違和感に気付く。

足が動かない。何かによって足止めをされているようだ。

「所詮人間とはこんなものよ」

皇帝は僕に一瞥すると、間合いを取り詠唱に入る。

皇帝の足元には魔法陣のようなものが、頭上には岩のようなものが出現する。

皇帝の罠により動けなくされた僕には動いたための策がない。

そして、皇帝は詠唱を終えると大小の隕石を戦場一帯に降り注がせた。

皇帝の放った隕石が次々と僕の身体を掠め、最後には特大の隕石が僕を圧迫した。

そして、目の前が真っ暗になった。

「やはり初心者だったのね。キャラクターそのものになりきるのは凄いと思うけど、結局はあなたがそれに対応できなければ意味がないのよ。それにあなたは画面しか見えていないの。もっと周りに目を向けるべきだわ」

黒猫が岸嶺にお説教をしている。罷り間違ってもフルボッコにした相手にするような行為ではないだろう。

だが、これは黒猫なりの賞賛なのだと思う。岸嶺の力を認めているからこそ、説教という名のアドバイスをしているんだと俺は考えるね。

最終的に、黒猫が部長、天道、瀬名先生を倒して俺たちが優勝してしまった。マジでなんなんだろうな？ 黒猫のこのゲームスキルはよ。

優勝の何やらが終わってから岸嶺が俺に話しかけてきた。

「ど、どうも、僕は現代遊戯部員の岸嶺健吾です。今日はありがとうございました」

お、律儀だな。わざわざ挨拶してくれるなんてな。

「俺は高坂京介だ。悪いな、黒猫が余計なことばかり言って」

黒猫本人に代わって何故か俺が誤ってた。まあ、謝り慣れてるしどうってことはないが。

「いえ、黒猫さんの言うことは理にかなってるので問題ないですよ」
「そう言ってくれると助かるよ」

「そう言えばあの人、あなたと同じ部活に入ってるんですよね？」

あの人？ ああ、部長か。

「うちの部長がどうかしたのか？」

「いえ、凄いなと思って」

うちの部長が凄いなあ？ そりゃ確かに外でエロゲできるほどのメンタルはあるだろうけどな……

「だって、瀬名先生の話についていけるんですよ」

瀬名先生と言えば、声優と結婚云々の人だよな？ そんなに変わった人なのか？

「その瀬名先生ってのはそんなに変わり者なのか？」

あまりにストレートすぎる気もしたが、質問してしまったものは仕方がない。

「ええ、かなりの変わり者ですよ。いつつも婚姻届持ち歩いてますし」

こりゃマジで変わり者なんだな。なんで俺の周りには変な人しかないかね？ もしかして俺が変なやつだからか？ 類は友を呼ぶと言っし……

「ここで会ったのも何かの縁ですよ。番号交換しませんか？」

「ん？ 番号？」

「はい、携帯電話のです」

なんだか1年ほど前にもこんなことがあった気がするが……

そうだ！！ あやせのときもこんな感じで番号を交換したよな……

「ああ、いいぞ」

まあ、大丈夫だろう。そう納得することにして赤外線番号とメアドを交換した。

「ではまた、なにかあったら連絡させてもらいますね」

「よろしく頼むよ」

俺たちが番号を交換し終えるのとはほぼ同時に岸嶺の後ろから女の

声が聞こえてきた。

「何をしているんだ、岸嶺君？　そこにいるのは……決勝戦の相手チームか」

岸嶺の知り合いということは、おそらくこの声の主は天道だろう。
「私は現代遊戯部の部長を務める天道しのぶだ」

天道が俺に自己紹介をしてきた。

「俺は高坂京介だ」

「高坂か……ほかのチームメンバーも紹介してくれないか？」

天道は俺に桐乃たちを紹介するようにと言ってきた。
断る理由もないので紹介してやる。

「こっちは高坂桐乃、俺の妹だ。で、こっちの背が高いのが沙織・バジーナ。ゴスロリは黒猫だ」

「沙織・バジーナ？　黒猫？」

ああ、そうか。普通こんな聞かされても分かんないよな。

「沙織つてのは……」

俺がそう言おうとすると、白衣の人が会話に割ってはいる。

「おそらくはハンドルネームだな。そして、その黒猫という子は松戸ブラックキャットだな？」

この人は……瀬名先生だな。

「あら、よく知っていたわね」

黒猫が白衣の男に向かってそう言った。

「ネットでは有名な名前だからな。知っていて当然というものよ」
そんなに有名だったのか、お前。

「ところで……さっきから気になっていたのだが、君のその服はもしかして……」

天道がそのようなことを言った。服？　俺じゃないだろうから、おそらく黒猫だな。

天道の視線を辿ってみると、確かにそれは黒猫のほうに向かって
いる。

「マスケラの夜の女王ではないのか！？」
クイーン・オブ・ナイトメア

語尾が少しきつい。というより天道はマスクラを知っていたのか。意外だな。

「ええそうよ。それがどうかしたかしら」

まじで女王様かと思うような口ぶりだ。ちつとは年上に遠慮しろつての。

「あれ、天道さん？　なんでそんなこと知ってるんですか？」

そう言ったのは岸嶺だった。

岸嶺のその言葉を聞き、天道の顔が見る見る紅潮していく。

「いや……そのポスターでな……見て、そのだな……もうっ！！」
噴火しそうなぐらい赤くなった顔でそんなことを言う。

この反応は間違いなくアニメの方面にも手を出してるんだろっな。そして、桐乃と同じく世間体を気にするタイプなんだと思う。

「そうでござるな、また今度皆で一緒にせぬか？」

突然沙織がそんな提案をした。

当然皆みんなの答えは——YES

こうして、俺の夏休みは幕を開けるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1555u/>

俺の夏休みがこんなにゲーム戦争なわけがない～短編～

2011年9月26日03時21分発行